

審査の結果の要旨

氏名 デル バリオ アブバレス ダニエル

本論文は、「Proposal of a comparative framework for regional development banks involvement on regional infrastructures projects」と題し、地域インフラプロジェクトに対する開発銀行の関与に関する比較フレームワークを提案するものである。地域インフラプロジェクトは、資源の持続可能な利用、投資に対する規模の効果、政治的緊張の緩和など、全てのステークホルダーに大きなメリットをもたらすものであるが、実現のためには政治的、制度的、経済的課題が存在する。なかでも政治的意志の欠落は最も大きな障害である。このような課題を克服し、地域インフラプロジェクトを実現する上で、開発銀行の果たすべき役割は大きい。しかし、開発銀行が取るべき方策については、経験に依存するところが大きく、過去の事例を分析し、新しいプロジェクトに活かす方法論は十分に備わっているとは言えない。

本論文は、このような問題点を克服するための方法論を構築することを目指している。そのために、既存の事例を分析し、関連する開発銀行の方策を特定する方法を提案している。本論文は、1) 地域インフラプロジェクトの開発プロセスに影響を及ぼす文脈依存性を特定し、2) 開発銀行の方策の文脈依存性を評価した上で、3) 開発銀行が既存の事例から方策を特定するための比較分析枠組みを提案することを目的としている。

まず、地域統合の達成度合いと、地域間、セクター間の比較を行うためのセクターと地域の組み合わせという2つの基準に基づいて、分析を行う3事例の選択を行っている。地域インフラプロジェクトの開発プロセスは、i) 国家的主体の合意、ii) 高度な政治的合意、iii) 建設工事の進展、iv) 制度構築、v) 協調の5段階に分けられる。選ばれた3事例について、それぞれ、地域インフラプロジェクトの開発プロセスにおける5つの段階毎に因果分析を行い、影響因子、開発銀行の方策、アウトプットを抽出している。影響因子の抽出を通じて、各プロジェクトにおいて特定の文脈がプロセスにどのような影響を及ぼしたのかが深掘りされている。

次に、3事例から抽出された影響因子の比較と統合が行われている。影響因子は9つのカテゴリーに分類される。影響因子のカテゴリーは全て、政府と政府、専門家集団と専門家集団、政府と専門家集団、国家的アクターと専門家集団という主体間の関係性と対応し、文脈依存性を表していることを示している。

さらに、開発プロセスの各段階における文脈依存性の相対的な重要性を評価し、開発プロセスの段階毎に支配的な文脈依存性が変化すること、それぞれの段階で3事例に同様のパターンが存在することが明らかにされている。これらの結果に基づき、開発銀行が既存

の事例から当該のプロジェクトにおける最適な方策を特定するための比較分析枠組みが提案されている。

最後に、提案された比較分析枠組みを用いて実際にどのように開発銀行が採用すべき方策を導き出すことが出来るかを示している。アジア開発銀行の職員に対するインタビュー調査の結果として、実務者が本論文の提案する手法を高く評価していることも示されている。

地域インフラプロジェクトは、大きなメリットをもたらすものであるが、実現のためには多くの課題が存在する。地域インフラプロジェクトを実現する上で、開発銀行の果たすべき役割は大きい、開発銀行が取る方策は、経験に依存するところが大きい。過去の事例を分析し、新しいプロジェクトに活かす方法論の必要性は広く認識されているが、具体的な方法論は十分に備わっているとは言えない。

本論文は、このような問題点を克服するための方法論を提案している。既存の事例を分析し、最適な開発銀行の方策を特定する方法を提案している。地域インフラプロジェクトの開発プロセスに影響を及ぼす文脈依存性を特定し、開発銀行の方策の文脈依存性を評価した上で、3) 開発銀行が既存の事例から採用すべき方策を特定するための比較分析枠組みを提案している。

複数の既存事例を分析し、その結果を比較分析することにより、採るべき方策に関する知見を得るといふ、本論文の提示した方法論には新規性が認められ、また、実務者が採用し、経験のみに拠るのではなく、論理に基づいた根拠を示し得る方法論には高い有用性が認められる。特に、開発銀行が被援助国に対して方策を提言するとき、論理に基づいた根拠を示すことは、その説得力を確保するために極めて重要である。事例分析の結果から一般性の高い知見を得る方法論を構築するという本論文の提示する研究アプローチは、開発研究の分野に留まらず、多くの実務者が必要とする知識の体系化に資するものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論として合格と認められる。